

ま え が き

本書は、2015/16年度にアジア経済研究所で実施された「冷戦後アフリカの土地政策」研究会の成果である。この研究会は、冷戦終結後にアフリカ諸国で土地法改革が相次いだことを受けて、その意味や農村社会への影響を検討するという問題意識のもとに開始された。ただし、この研究会は、個人的にここ数年取り組んできたアフリカの土地問題に関する研究のとりまとめという側面ももっている。私は、JICA 研究所に出向していた2011年頃から土地問題について勉強する機会を得て、以来研究プロジェクトを連続して実施してきた。JICA 研究所での研究成果は Takeuchi (2014) に、アジア経済研究所に戻ってから立ち上げた研究会の成果は武内 (2015) として刊行された。本書は、これらに続く仕事である。

3つの研究成果はいずれも、政策（外部介入）が社会にいかなる影響を与えるのかという問題意識を基礎にしている。それは、どのような政策をとるべきなのかという問いと裏腹の関係にある。どうすべきかを考えるためにどうなっているのかを勉強することは当然だが、それとともにこれまでに実施した外部介入の経験について評価する必要がある。上記の問題意識はその点にかかわる。

Takeuchi (2014) では、武力紛争が終結した後になぜ土地紛争が頻発するのか、それを收拾、抑止するための政策をどう評価するかを考えようとした。多くの共同研究者を得て、アジア、アフリカ、ヨーロッパ、ラテンアメリカの8カ国の事例を検討した。この研究プロジェクトを通じて、土地紛争の争点はその権利関係（所有権）にあり、土地所有権には国家・社会関係が反映されることが理解できた。マクロレベルの武力紛争がミクロレベルの土地紛争を誘発するのは、政治秩序が崩れ、国家・社会関係が混乱することによ

って、土地所有権が不安定化するからである。この研究会は大変有意義だったが、同時に自分がいかにアフリカを知らないかということも気づかされた。土地問題を勉強するには、各国の政治や社会、そして関連する政策や法律に関する理解が不可欠だ。この研究会を通じて、自分はアフリカ研究者を名乗っているにもかかわらず、そうした知識がまったく乏しいと痛感させられた。

そこで、2012年に出向を終えてアジア経済研究所に戻った機会に、アフリカに対象地域を絞り、腰を据えて土地問題に取り組もうと考えた。幸い、アジア経済研究所では、自由な発想で研究会を組織し、2年という期間を使ってじっくり物事を考えることができる。まずは、アフリカ各国の土地政策の歴史から勉強しようと考えた。自分1人でできることは限られているので、アフリカ各国の状況に知見が深い地域研究者に参加してもらった。その成果が、武内（2015）である。この研究会を通じてわかったことは、土地に対する政策介入が資源管理と領域統治——別の言葉を使えば、開発と支配——という2つの側面をもつことだ。アフリカ各国の土地政策を1世紀あまりのタイムスパンで辿ると、2つの関心がせめぎあいながら併存してきたことがわかる。土地政策はふつう資源管理（開発）の側面から分析されるが、領域統治（支配）という視点からみることも忘れてはならない。この視角は、本書の分析でも踏襲されている。

2つの研究会は自分にとって苦しくも実りの多いものだったが、なお勉強すべき課題が残っていると感じていた。2000年代末から世界的な関心を集めるに至った大規模な土地取引や囲い込みがそれである。アフリカの幾つかの国で、途方もない規模の土地が取引され、占拠されている。その主体として外国民間企業がやり玉に挙げられることが多いが、よく観察すると事態はそれほど単純ではなく、アフリカ人自身も土地囲い込みの主体となっている。一体なぜこうしたことが起きるのか、考えねばならないと思った。同じ時期、耕作者の土地権利強化をめざしてアフリカ各国で土地法改革が実施され、ドナーはそれを積極的に支援してきた。耕作者の土地権利強化をめざす土地改革が実施される一方で大規模な土地囲い込みが進行するという現象を、どう

考えればよいのだろうか。

この問いに答えるには、政策の分析とともに、アフリカにおける農村変容の実態とメカニズムを理解する必要がある。これらすべてを1人で行うのは難しいが、共同研究会の枠組みを使えばある程度のことになるかもしれない。そう考えて「冷戦後アフリカの土地政策」研究会を組織することにした。2年間の研究会を終えて、不十分ながらある程度の答えを本書に書き込むことができたと感じている。詳細は終章に譲るが、権威に基づいて土地所有権を分配する体制が変わらない——あるいは強化される——なかで、グローバルな、またアフリカ社会内部の要因から土地に対する需要が顕著に高まったことが、大規模な土地囲い込み頻発の背景にある。

このメカニズムを本書がどこまで説得的に説明することができたかは、読者の判断を待つしかないが、編者としては、とにかく本書を世に問う必要を感じている。それは、アフリカで起こっている農村変容が極めて劇的であり、それに対する認識と理解を深めるとともに、対策について広く議論することが喫緊の課題だと思うからである。本書の分析が不十分で批判を浴びたとしても、そうした批判を含めてアフリカ農村に目を向けることが必要だ。今日のアフリカ農村では、所有地の細分化が進んで生存維持農業さえ難しくなっている地域がある一方で、広大な土地がごく安価で外国民間資本や国民の一部に移転されている地域もある。いずれもこのままの状態が持続可能だとは思えず、緊急かつ真剣に対応を検討する必要がある。本書の刊行によって、そうした現状を知らしめ、議論を喚起することができればと考えている。

*

繰り返しになるが、本書は共同研究会の成果であり、共同研究会での議論をふまえて執筆されたものである。共同研究会のメンバー（委員、オブザーバー）のなかには前回から連続してお付き合いいただいた方々もおり、2年から4年にわたって議論を続けてきた。気心の知れたメンバー間で忌憚りな

い意見交換を続けられたからこそ、何とか成果をまとめることができた。その意味で、共同研究会のメンバーには深く御礼申し上げたい。加えて、講師として知見を提供してくださった島田周平（名古屋外国語大学）、佐川徹（慶応義塾大学）、目黒紀夫（広島市立大学）の各氏、そして今回の研究会でも手弁当で参加くださり、毎回貴重な知見を披瀝してくださったアジ研の大先輩の吉田昌夫さんに心からの感謝を申し上げたい。

*

本書の原稿を提出した後、2017年4月より、私は東京外国語大学に設置された現代アフリカ地域研究センターに異動した。幸い、提出原稿はアジア経済研究所の査読をとおり、出版の運びとなった。ここ数年来考えてきたことを書籍の形にする目途が立ったことを嬉しく思っている。クロスアポイントによりアジア経済研究所の勤務も継続するが、そこでの仕事に一区切りついた感は抱いている。といっても、やはりこれからも土地をめぐる問題にこだわってアフリカを考えていくのだろう。勉強をするほどに、土地をめぐる問題は奥が深いと感じている。

2017年6月

編 者

<文献>

武内進一編 2015. 『アフリカ土地政策史』 アジア経済研究所.

Shinichi Takeuchi ed. 2014. *Confronting Land and Property Problems for Peace*, Oxon: Routledge.